第2回 認知症にかかる医療と介護の滋賀県大会

全県域の“現場の声”を結集

一般的に、医師とケアスタッフとの間にはまだ距離があるといわれている。一方で、医療職の関わり方しだいによっては、ケアスタッフのモチベーションを大きく高めることも可能だ。滋賀県ではそうした取り組みが“手作りの学会”として進められている。

第2回　認知症にかかる医療と介護の滋賀県大会

平成28年12月18日（日）13：00～17：00

目的　県内の認知症の医療・介護・福祉・行政等の専門職による優れた実践事例や研究を現場へ還元するとともに、多職種連携や多職種相互理解を促進して専門職のさらなる研さんに資するため、演題を公募してポスター発表を行う。

56演題が集まり、320名が参加

収容人数216人の大会議室はテーブルや椅子が取り払われ、規定人数よりもはるかに多くの参加者で埋め尽くされていた。会議室の外の琵琶湖を見渡すホワイエにも人があふれている。平成28年12月18日、第2回『認知症にかかわる医療と介護の滋賀県大会（以下、滋賀県大会）』の会場となったピアザ淡海（大津市）はたいへんな熱気に包まれていた。

滋賀県大会は、認知症の医療・介護・保健・福祉に携わる人たちがポスターセッションの形式で自分たちの取り組み、その結果、課題などを発表し合い、意見を述べ合う“手づくりの学会”だ。主催は滋賀県。藤本クリニックの藤本直規理事長が大会長を務め、滋賀県医師会をはじめとする県内の関係13団体（第1回大会は10団体）の後援を得ている。

平成28年3月に開催された第1回大会には、予定の200名を上回る256名（発表者含む）が参加した。第2回大会はそれをさらに上回り、参加者320名という盛況ぶりとなった。

【ポスター発表の形式】

- 演題数56（第1回は40）
- 会場内外（ホワイエ含む）を4エリアに分け3部構成で発表。
- 各エリアとも医師が交代で座長を担当（計14名）。
- 1演題の発表時間は10分（発表7分、質疑応答3分）。

表1　第2回大会 ポスター発表者の職種別内訳

医師	4	病院1、診療所3
認知症看護認定看護師	4	病院4
看護師	11	病院6、診療所2、老健・訪問看護等3
介護職員	11	デイサービス5、グループホーム3、特養1、小規模多機能2
介護福祉士	7	老健4、デイサービス1、グループホーム1、その他1
ケアマネジャー	5	病院1、特養1、グループホーム1、その他2
保健師	4	県2、市2
作業療法士	4	病院2、デイサービス2
社会福祉士	2	
薬剤師	1	
認知症地域支援推進員	1	
家族会	1	
その他	1	
計56名		

大会議室には収まりきらず、ホワイエも発表の場に。

医療・介護・保健・福祉のカテゴリーを取り払った混合ポスターセッション

大会長の藤本先生が、「職種も経験年数も立場も関係なく、ただ、“滋賀県で認知症の医療とケアに携わっている現場の人”ということを唯一の参加条件にしました」と言うように、公募に応じた発表者の職種も、医療分野、介護分野、行政、家族会など非常に多岐にわたっている（**表1**）。

56演題を4エリア、3部構成に割り振るにあたり、発表者の所属機関（病院、診療所、介護施設……）、職種、テーマなどのカテゴリーでくくることはあえてしなかった。だからたとえば、ケアマネジャーが認知症の人の在宅生活支援事例を紹介した後に、放射線科医が画像診断例の検討結果を述べ、看護師が院内デイケアの有用性を報告する、といった展開も生まれる。どのエリアであれ、何演題か聞いているうちに自然に、認知症の人に対して幅広いアプローチが実践されていることを実感できるわけだ。

「急性期病院での認知症ケア、施設でのBPSD対応、地域での見守り、在宅での看取りなど、われわれが医療とケアの現場で難儀していることがほぼ網羅されています。抄録の演題名を見るだけでも、すごく興味が沸くと思いますよ」と藤本先生が話す。

医療法人 藤本クリニック
理事長
藤本 直規 先生

滋賀県大会の抄録は、滋賀県のホームページからダウンロードすることができる（「認知症にかかる医療と介護の滋賀県大会について／滋賀県」で検索）。

第2回大会の会場内を回っていてこのような場面に出会った。

施設の介護職が、認知症の人への対応において、大人同士の関係性を重視して決して嘘をつかないという心構えを述べていた。発表後の質疑応答で医師が、嘘の是非はともかく、自分が日頃、認知症の人をどう見ているのかが問われるテーマだとし、「発表をすごく楽しみにしていました」と語った。

作業療法士による回復期リハ病棟での活動の発表後には、薬剤師が、入院患者の在宅での生活サイクルを聞くことで睡眠薬によらない対応がとれた事例を話し、「そうした面でも薬剤師を活用してほしい」とアピールした。

こうした職種を超えた視点・経験・ノウハウの交換が、会場のあちこちで進められていった。

滋賀県大会開催の経緯と意義

県の事業として、専門職からの相談に対応

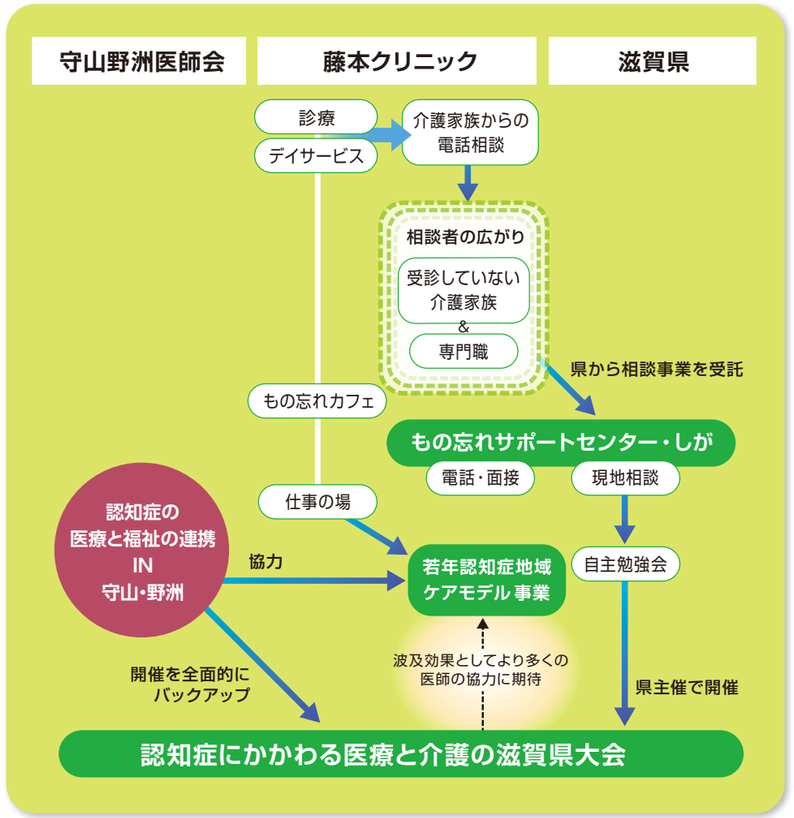
若年・軽度認知症専用デイサービス『もの忘れカフェ』や、退職直後の若年認知症の人が内職仕事に集まる『仕事の場』などの取り組みで知られる藤本クリニックは、平成11年の開設当時から、通院患者とデイサービス参加者の介護家族からの電話相談に時間制限なしで対応してきた。

その後徐々にクリニックに受診していない介護家族や専門職からの相談も増えてきたため、平成17年、滋賀県から認知症に関する相談センター「もの忘れサポートセンター・しが」の委託を受けた。8年間に延べ3千件以上の相談(電話・面接)があり、半数は介護家族から、残りの半数は専門職からの相談だった。平成23年には「滋賀県若年認知症コールセンター」の委託も受けている。

これらの相談事業は、藤本クリニックが平成26年に指定を受けた『認知症疾患医療センター診療所型』の重要な機能となっている。

相談事業の一環として、滋賀県から『現地相談』の委託も受けている。現地相談とは、藤本クリニックの看護師である奥村典子さんが事業所や施設に出向き、認知症ケアの実践現場で問題解決に一緒に取り組むアウトリーチ活動だ。平成17～26年の現地相談の述べ回数は149回に及ぶ。

平成26年には、前年度の訪問先のケアスタッフ20数名がクリニックに集まり、現地相談で決めた取り組みを継続すべく『自主勉強会』をスタートさせた。



現場の地道な取り組みを発表し、評価を受ける場を

「藤本先生や私の講義を聞くことがこの自主勉強会の目的ではありません。自分たちの取り組みをまとめるための会なので、私が説明するのはそのまとめ方です」

平成27年4月、奥村さんの発言に、守山駅前コミュニティホールに集まった70～80名のケアスタッフから驚きの声が漏れた。

自主勉強会が2年度目に入り、奥村さんと藤本先生は参加者の枠を広げることにした。参加を希望した70～80名のケアスタッフの半数近くは、講義が聞けるものと思って来たようだ。そこに前述の奥村さんの発言である。勉強会を“自分たちの取り組みをまとめる会”とした背景には、現地相談や自主勉強会でケアスタッフと交流するなかで、奥村さんが感じた歯痒い思いがあった。

「ケアスタッフは毎日一生懸命、いろいろなことに取り組んでいます。ただ、認知症の人のケアには、この状態になれば良いという“答え”がないため、『本当にこれでいいのか』と日々悶々としているのです。自分たちの実践を発表する場が与えられ、『それでいいよ』と言ってもらうことができれば自信になるし、正しい評価に基づいて次の取り組みを考えることもできると思いました」

医療法人 藤本クリニック
デイサービスセンター 所長
奥村 典子 さん

藤本先生が「現地相談の一時期、『それでいいよ』という言葉をケアスタッフに残してくるのが奥村の仕事でした」と言い添える。

日々の実践を発表する場として用意されたのが、**『認知症にかかわる医療と介護の滋賀県大会』**だ。クリニック開設当初から、藤本先生らは当時の県の認知症施策担当者と「いずれは滋賀県発の学会を」と話し合ってきた。その思いは歴代の担当者にも受け継がれており、県の事業として発表の場を設ける運びとなった。

抄録のまとめ方をいちから指導

日々の実践を正当に評価してもらうためには、前提として、実践内容を簡潔明瞭に伝えられなければならない。自主勉強会に参加したケアスタッフのほとんどは、学会などでの発表の経験を持たない。だから「言語化・文章化」のスキルを磨く必要があった。

奥村さんはまず、抄録の【はじめに】【目的】【方法】【結果】【考察】といった項目で何を伝えればいいのか、日常の言葉で説明していった。「何をしたかったの？ Aさんが落ち着いて食事ができるようにしたかったんだ。それが【目的】でしょう」というように。

こうして参加者が難しく考え過ぎず、自分の言葉で言語化できるようにお膳立てをした。

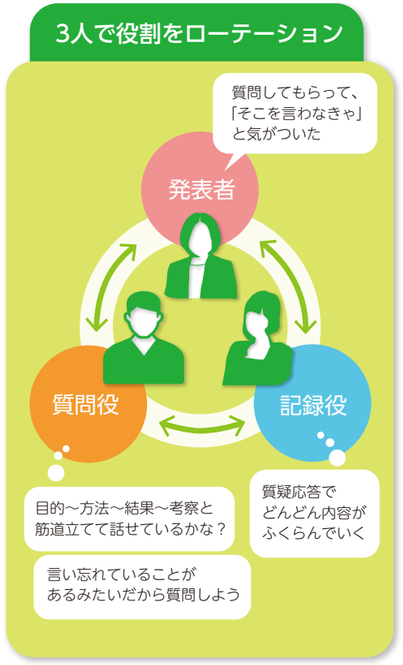
次に参加者を3人1組に分け、自分の取り組みを説明し合ってもらった。発表時間は質疑を含め1人40分。1人が発表者、1人が質問役、1人が記録役を務め、役割をローテーションしていった。

「ケアの実践者同士なので、質問者は発表者が言葉にし忘れた部分に気づき、質問によってそれを引き出してくれます。その結果、記録の内容がどんどん充実していきました」(奥村さん)

参加者は、自分の発表の記録を持ち帰り、抄録の構成に沿ってまとめ直した。7月の第2回勉強会ではその内容をさらに見直して抄録を完成。10月の第3回で発表ポスターを作成し、翌平成28年1月のプレ発表会を経て3月の第1回滋賀県大会を迎えた。

藤本先生は、こうした「言語化・文章化」のトレーニングが日頃の連携にも役立つと話す。

「ケアスタッフが医師に相談する際に、『こういう問題があってこのような取り組みをしたのですが、この部分だけは改善しないので先生、何とかお願いできませんか』といったポイントを押さえた依頼をすれば、医師もより協力しやすくなります」



医師の協力の輪を守山野洲から全県域へ

守山野洲医師会では平成24年から藤本クリニックの協力のもと、多職種がテーマ別にグループワークを行う「認知症の医療と福祉の連携ーN守山・野洲」(以下、ーN守山・野洲)を開催している(本誌20号で紹介)。多職種による議論の取りまとめ役を医師が担うことで、医療の視点に加えて生活の視点も重視するようになったことがーN守山・野洲の大きな成果だが、その医師たちが滋賀県大会の運営の柱となっている。藤本先生が第1回大会の抄録の査読と座長をお願いしたところ、皆、快く引き受けてくれた。演題提供にも2つ返事で応じてくれた。

ケアスタッフと何度もやりとりをして抄録内容のブラッシュアップに尽力してくれたり、座長として発表者を優しくフォローしてくれたり、どの医師もとても親身に対応してくれたという。多職種連携の積み重ねの賜物だ。

第2回大会では、前回の参加者名簿に名前があった医師に県が連絡し、査読と座長をお願いした(快諾)。今回は座長17名中8名が守山野洲医師会以外の医師会員である。藤本クリニック以外の県内7カ所の認知症疾患医療センターの協力も得られ、全保健所圏域の医師に輪が広がった。

新たに査読・座長を担当した医師たちも、「抄録はこれでOKですが、当日は薬のことも聞かれ

第2回大会の発表を終えて

関口さんは第1回大会に続く2度目の発表。今回は、認知症のAさんの自宅での生活を、医師の意見、サービス事業者間の連携、家族や友人、近隣住民の協力のもとで支えている事例を発表した。

介護支援専門員
草津市老上在宅介護支援センター きはん
関口 志保理 さん

「1回目の発表を終えてすごく達成感があったので、次はどの方の事例を発表しようかと思いながら関わりをさせていただきました。以前なら対応に精いっぱいだったような状況でも、その方の変化に合わせて、次はこう、その次はこういうように、より具体的に連携の段取りを考えられるようになりましたので、発表はとても良い経験になっています。次回は、私の担当する方が利用しているデイサービスのスタッフと、『共同で発表したいね』と話し合っているんですよ」

「抄録や発表ポスターを作成する過程で、もっとこういう働きかけもしなければと感じることも多いので、日頃の業務にもとても役立っています。ご本人の変化だけでなく、自分たちが行ったこともきちんと振り返り、整理することが大事なこと、今まではそれができていなかったことに気づけたのは大きな経験でした。ケアの世界は外からは見えにくいだけに、『こんなに細かい工夫を毎日一生懸命積み上げているんですよ』とアピールできる機会はとても貴重だと思います」

生活支援員
特別養護老人ホームふくら
中嶋 美樹 さん

中嶋さんは今回が初の発表。チームの実践を、メンバーへのアンケートによって振り返ることで、個々の工夫や、互いを認め合っていることなどが形となって現れ、チームへの信頼・自信と次への意欲が高まったことを報告した。

―県担当者より―

藤本先生と奥村さんは、「常に県と共に歩んできました」と口を揃える。平成28年度から現職となった岡野課長とも、『滋賀県マインド』はしっかり共有されている。

滋賀県　健康医療福祉部
医療福祉推進課　課長
岡野 和薫 さん

大会を継続することが重要と認識しています

「医療やケアの現場における多職種連携の実践の積み重ねが、このような大会に自然に結び付いているところが、滋賀県らしい取り組みと言えるのではないでしょうか。大会が実践の共有の場になっていることに加え、抄録やポスターの作成を通して事業所内での知識の共有も強まるなど、さまざまな相乗効果が生まれていると耳にしております。医療やケアの現場の取り組みは刻一刻と進化していますので、この大会を継続していくことが重要であると認識しています」

―査読・座長を担当した医師より―

『認知症の医療と福祉の連携ーIN守山・野洲』のメンバーである福田先生は、第1回大会・第2回大会ともに査読、座長を務め、演題発表の依頼にも快諾した。

ふくだ医院 院長
守山野洲医師会 会長
福田 正悟 先生

医師と他職種との距離が縮まりました

「第2回大会に56もの演題が集まったことは驚きでした。それだけ、全県域で多職種連携が進んでいるということだと思います。私は前回、守山市地域包括支援センターの保健師さんと共同で発表を行いましたが、発表の打ち合わせをしたり、この場で他職種の方々とお話しすることで、かなり距離が縮まったように思います。というのも、地元の多職種連携の会であるIN守山・野洲への参加者が少しずつ増えており、今は60～70名が2カ月に1回集まり、和気藹々と会を進めています」

やはりIN守山・野洲の西村先生も2大回連続で査読、座長を担当。「後に残るものだから」と丁寧に査読を行う様子が奥村さんの印象に強く残っているという。

守山市民病院 名誉院長
西村 直卓 先生

急性期病院の実践に刺激を受けました

「新オレンジプランでは、急性期病院は認知症の人の身体合併症等への対応が弱いとされています。しかし今日の発表を聞いていると、頑張っておられるところがありますね。認知症看護院内認定ナースの育成プログラムを実施している病院、院内デイケアを開設している病院などの存在を知ることができたのは大きな成果です。この大会を通じて、病院と在宅ケアスタッフの結び付きが強まり、入院前、入院中、退院後の情報がきめ細かく共有できるようになることを期待しています」

長浜市の橋本先生は元滋賀県医師会認知症担当理事。発表者が萎縮しないよう配慮しつつ、「これは指摘してあげるべきだよね」と旧友の藤本先生に相談していた

橋本医院 院長
橋本 修 先生

発表を通じて自己検証の重要性が学べます

「前回、私は医療情報共有システムを利用した認知症画像診断について発表しました。自分がこうだろうと考えていたことと、画像診断の結果が異なることもあり、認知症診断の奥深さを実感しています。人前で発表するためには、自分の考えが本当に正しいのかどうか、自己検証を重ねなければなりません。そうしたネガティブなフィードバックがかかる思考の持ち主がケアの現場にも必要です。特に若い方々にとって、この大会での発表は重要な成長の機会であると感じています」

高島市で在宅医療のネットワークを牽引する前田先生は、第1回大会に聴衆として参加していた。それを知った県から査読と座長を依頼され、快く引き受けた。

前あいりんクリニック 院長
高島医師会 副会長
前田 昌彦 先生

現場の声を聞く会を地元でも開きたいですね

「第1回大会のときは、若い方々も含めたくさんの現場の声が出てきて、良い感じだなあと思いながら聞いていました。高島市では、平成30年度からの地域包括ケアの実施に向け、医師会と行政が両輪となって準備を進めています。私はその責任者ということもあり、介護分野の方々と顔を合わせる機会が多いのですが、やはり管理的な立場の方々が中心になります。今後はこの滋賀県大会のように、現場の声を吸い上げる会を高島市でも立ち上げたいと考えているところです」

【滋賀県大会の主な意義】

- 課題や解決策を共有できる。
- ケアスタッフが、自分たちの実践に対する評価を得ることで、元気づけられたり、ケアの質の向上につなげられる。
- ケアスタッフが「言語化・文章化」のスキルを磨くことで、医師への相談・依頼がよりスムーズになる。
- 医師がケアスタッフの視点や取り組みを知るなど、多職種の相互理解が増す。
- IN守山・野洲の医師たちが進めてきた県の事業（就労支援のための若年認知症企業研修など）に対し、各地域の地元の医師の参加を呼びかけやすくなる。

こうしたことが認知症の人と家族のメリットにつながることは間違いない。「それが最大の目標ですから」と藤本先生が言う。